

## 『小梅ちゃん』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



「実は…死亡診断書の死因のところに『老衰』と書かれるのはイヤって言ってたんですよ…」と、少し言い難そうに、娘さん。死亡診断書に記載する病名は医師が医学的見地から判断して決めることであって、本人や家族が「注文」できるようなものではないとわかっているからこそ、ご家族は申し訳なさそうなそぶりを見せたに違いない。しかも、小梅ちゃんはその時点で間もなく99歳になろうとする98歳という年齢。98歳で『老衰』という死因を書かれるのがイヤって、お母さん、どうなのよ？と、半ば呆れるような気持ちも家族にはあるように感じた。

もちろん、死亡診断書は公文書なので、事実を捻じ曲げて本人や家族の希望通りに記載したりできるようなものではないし、そんなことをしたら公文書偽造の罪を犯すことになってしまう。刑法160条には、「医師が公務所に提出すべき診断書、検案書又は死亡証書に虚偽の記載をしたときは、3年以下の拘禁刑又は30万円以下の罰金に処する」とある。虚偽の記載なんてできるわけもないし、万が一、僕が家族の希望で虚偽の記載をしていたら(してませんけどね)、こんな文章を書くわけがない。

小梅ちゃんは、98歳とは言え非常にしっかりしている人で、家族によると、『老衰』と書かれて年寄扱いされるのがイヤという以上に、死ぬには何か原因があるはずなのだから何となく歳のせいみたいな印象がある『老衰』とされてしまうのがイヤ、ということでもあったらしい。確かに、一理なくもない。そして、そもそも死因自体、厳密に考えるとそんなに簡単に特定できるものではない。亡くなったすべての人を解剖して死因を特定するのは現実的ではないし、仮に解剖したからと言って、死因が100%はっきり特定できるわけでもない。超高齢者の場合は特にそうだろう。

小梅ちゃんは、急性心筋梗塞を発症したこともあり、心不全や腎不全の他に難治性の貧血もあり、毎月、病院で輸血をしていたし、入退院を繰り返してもいた。僕が紹介を受けた時は、まさに満身創痍の状態だった。けれども、小梅ちゃんは決して病人風ではなかった。周りの人を安らがせるなんともチャーミングな笑

顔を温えている愛らしい人だった。僕が訪問診療で診させてもらったの

は半年間だったが、小梅ちゃんはいつも僕の訪問を心待ちにしてくれていて、訪問する日は、娘が小声で教えてくれるには「おしろいはたいて」ソファに座って待っていてくれたりもしたし、「先生、なかなか来てくれないじゃない。先生が夢の中にまで出てきたよ」と、少し甘えた風に言われることもあった。「最近、元気になって、よくしゃべる、しゃべる」と、半ば呆れたように娘さんが嬉しそうに教えて下さるのを僕も嬉しい気持ちで聞いていた。

そんな小梅ちゃんも、少しずつ寝ている時間が増え、口から食べる量が少なくなっていった。そんな中、亡くなる数週間ほど前、小梅ちゃんは肺炎を発症した。抗生剤の点滴をすることで、肺炎自体は改善したかにも見えたが、完全に回復するまでには至らず、以前よりさらに眠っている時間が増え、食べたり飲んだりすることもできなくなり、小梅ちゃんは少しずつ小さくなっていった。再び元気になってくれる可能性はないと判断した時点で、ご家族とも相談して、小梅ちゃんが最期の時を楽に過ごせることを優先し、点滴などの医療行為は一切中止した。小梅ちゃんが生涯の大半を捧げて活躍した大きなお寺の裏にあるご自宅で、小梅ちゃんは、まどろみの中、世寿99歳の生涯を閉じた。

死亡診断書に記載する病名について注文を受けたのは、小梅ちゃんが初めてだったかもしれない。家族から伝言で聞かされた注文だが、なんとも微笑ましい注文。「え～っ、小梅ちゃん、そんなことをっ!」と、思わずのけぞった。本来ならば厳粛で哀感漂う看取りの場面なのだろうけれど、集まっているご家族たちと一緒に声を上げて笑い合った。もしかしたら、今気づいたけど、それも、自分の死の場面でみんなに笑ってもらうための小梅ちゃんの作戦だったのかもしれない。

小梅ちゃん自身が詠んだ歌を最後に紹介致します。

老梅も 若本を杖に 九十有年

寺の繁栄 念じて 日々是好日

小梅